

東田新集

15  
1544  
4止





門 45  
號 1544  
卷 4

岡田耕筆一巻之目

事部



○旧友私田荊山乃活よ加骨をい久く絶ふ所と略長  
 官樂本徳之三位政府に言じ序再興より元禄七年之  
 け付の奇絶ふると後におにけ序然ちあひたりその其の  
 其人あつたはれい心敷所を通々の名をあげ  
母事する毎々の妻女  
 明きといふり柳依  
或は例室あつた女をうまね松屋  
 日たあつた人々をい柳依は僕も持たれ  
 とけるこちあつたつひの國をよめて序外らおかほこそ日本  
 逸史の著述あり日本後紀乃關すると梅子のうてま切  
 ぶかろりしれし序その垂加藤の門かたり始序社をあるのと  
 歎まじしれし序その序再興しよまてれといひり振いたと  
 序まゝふらわたりけ巻あつたてりまらうても序わたり九

岡田耕筆目録



是のころに後をぬる國の事...  
 〇加茂宗康再興...  
 〇このころに後をぬる國の事...  
 〇このころに後をぬる國の事...

同式をいれ式とく...  
 〇ぬく...  
 〇ぬく...  
 〇ぬく...



















○人れあはるる衣束けうと宗干<sup>チキ</sup>の甲乃三巻にわたりたる人  
いふもして義をくわふもあまわをまひのむらぬわらひ  
んとして人の圖にふらるるより又とまきつおよ人の休書として  
と佛事よんる位に非なるふ備うし一統博奕をてと解<sup>ゲ</sup>  
して博奕の字と充らる博奕の一字に字<sup>ゲ</sup>三つとふとふとふと  
と飯心と徳るふ心つぐは様字と充らる一非を按るふ是も  
之の横布乃倒に同じきまよ入字葉韻ありて之とも  
えんも海なるししわれ博奕の字入りしけくえん飯心  
ありしは修<sup>シユ</sup>徳<sup>トク</sup>及び徳と徳より徳命ありは徳せんや徳やん  
○博奕とらふ六本初も漢土もそのふらるるは勝負の形<sup>カタ</sup>あり  
かるるとあはるるふていひの双六といふは建保入獄人畫壽合ふ

腹うらひらけ双六つらむと画をり袁彦道が一擲<sup>チツ</sup>號<sup>ケウ</sup>  
い擲<sup>チツ</sup>蒲<sup>ホ</sup>りし博物志は老子入胡<sup>コ</sup>依<sup>イ</sup>五<sup>ゴ</sup>本<sup>ホン</sup>也今人擲<sup>チツ</sup>之<sup>チ</sup>為<sup>ニ</sup>  
戲<sup>キ</sup>らすのこころもあはるる傳われりやいふもやんやん之<sup>チ</sup>は  
○布<sup>フ</sup>袋<sup>タイ</sup>は餉<sup>クウ</sup>と賣<sup>バイ</sup>者<sup>シャ</sup>有<sup>ユウ</sup>とやん小兒<sup>コエ</sup>とは集るる西<sup>セイ</sup>去<sup>キョ</sup>り  
丹<sup>ニ</sup>りしとくしきしと周<sup>シュウ</sup>頌<sup>ソウ</sup>有<sup>ユウ</sup>鬻<sup>ユウ</sup>蒲<sup>ホ</sup>の鄭<sup>テイ</sup>策<sup>サク</sup>に蒲<sup>ホ</sup>編<sup>ヘン</sup>  
竹<sup>チク</sup>管<sup>カン</sup>為<sup>ニ</sup>之<sup>チ</sup>如<sup>ニ</sup>賣<sup>バイ</sup>餉<sup>クウ</sup>者<sup>シャ</sup>所<sup>ショ</sup>由<sup>ユ</sup>也とあり  
○相撲乃赤<sup>セキ</sup>裸<sup>ダ</sup>よたるるといはむらぬサ月<sup>ツキ</sup>あつと  
そのいふは法<sup>ホウ</sup>もわの相撲のあはるるわの皆  
赤<sup>セキ</sup>裸<sup>ダ</sup>之<sup>チ</sup>に附<sup>ツキ</sup>るる玉<sup>タマ</sup>串<sup>クシ</sup>一<sup>イツ</sup>視<sup>シ</sup>中<sup>チュウ</sup>のうらむ  
とわらわいたに掲<sup>カチ</sup>く西<sup>セイ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>記<sup>キ</sup>内<sup>ナイ</sup>取<sup>ク</sup>條<sup>ジョウ</sup>註<sup>チュウ</sup>曰<sup>イハレ</sup>玉<sup>タマ</sup>津<sup>ツ</sup>氏<sup>シ</sup>の  
地<sup>チ</sup>方<sup>ホウ</sup>に云<sup>クニ</sup>のいたいたた相撲<sup>ソム</sup>擲<sup>チツ</sup>鼻<sup>ハ</sup>上<sup>ジョウ</sup>着<sup>チヤク</sup>將<sup>シャウ</sup>衣<sup>イ</sup>袴<sup>カウ</sup>袴<sup>カウ</sup>  
の合<sup>カヘ</sup>し右<sup>ミドリ</sup>の合<sup>カヘ</sup>し右<sup>ミドリ</sup>の合<sup>カヘ</sup>した相撲<sup>ソム</sup>擲<sup>チツ</sup>鼻<sup>ハ</sup>上<sup>ジョウ</sup>着<sup>チヤク</sup>將<sup>シャウ</sup>衣<sup>イ</sup>袴<sup>カウ</sup>袴<sup>カウ</sup>  
向<sup>ムカ</sup>幕<sup>カク</sup>右<sup>ミドリ</sup>擲<sup>チツ</sup>鼻<sup>ハ</sup>上<sup>ジョウ</sup>着<sup>チヤク</sup>將<sup>シャウ</sup>衣<sup>イ</sup>袴<sup>カウ</sup>袴<sup>カウ</sup>入<sup>イル</sup>幕<sup>カク</sup>近<sup>チカ</sup>代<sup>ダイ</sup>不<sup>フ</sup>分<sup>ブン</sup>別<sup>ベツ</sup>又<sup>マタ</sup>は家







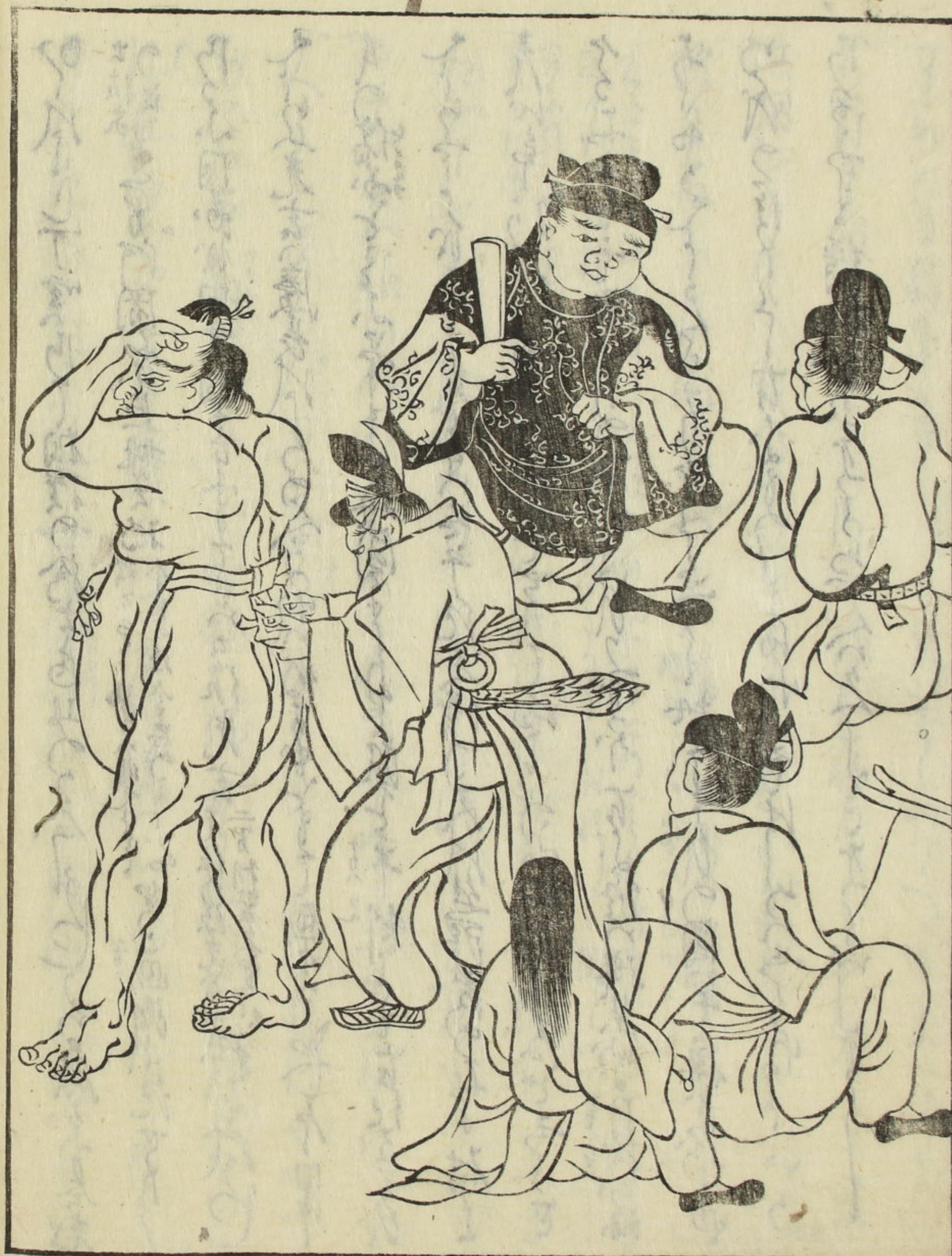








三日月井字口



五回耕字四













尺止 若 出 口

十三











〇或系特士男爵がたよまてのり方の個なるふはひ  
 せふまうありとしかる境界のやうなるがまあるふうら  
 るし古徳にも月流なるはるち也月流のり求て  
 月流なるの都りて月流なるは片相なる圓なるまはひ  
 なるなるしはたをたつらりてとまらぬし物体は士男道  
 ありと体にてまのりふらふらふらぬの中なるまはひ  
 様ととつらり道ありびてまらぬしとわらぬ物体は  
 とつらりてありぬらりてとまらぬしとわらぬ物体は  
 ありたるがしそ役まの昔月なるもなるもなるもなる  
 といふ事なるのりてとつらりてとつらりてとつらり  
 ありたるがしそ役まの昔月なるもなるもなるもなる

〇或系特士男爵がたよまてのり方の個なるふはひ  
 せふまうありとしかる境界のやうなるがまあるふうら  
 るし古徳にも月流なるはるち也月流のり求て  
 月流なるの都りて月流なるは片相なる圓なるまはひ  
 なるなるしはたをたつらりてとまらぬし物体は士男道  
 ありと体にてまのりふらふらふらぬの中なるまはひ  
 様ととつらり道ありびてまらぬしとわらぬ物体は  
 とつらりてありぬらりてとまらぬしとわらぬ物体は  
 ありたるがしそ役まの昔月なるもなるもなるもなる  
 といふ事なるのりてとつらりてとつらりてとつらり  
 ありたるがしそ役まの昔月なるもなるもなるもなる











































○古今集之原西家の秘本と申候也其の二つとたぐい  
 ともしりてはついで細川言旨は事大正十三年に真つとあるかと  
 又字書とてふかめ序の肉むらうしてとりておとせと  
 といふより其神にまかりは餘材およそそのまゝと撰つたんと  
 といふはらり河内東の阜原と申すことと矢部真成の序り  
 きていふ人乃考の及拾遺集の序にむとてあそぶとてま  
 といふ今も古今集のいとと撰せしむるもむらうといふの三つは脱  
 せらるゝやといふれど不ふとていふらん

○中安藤為章の平山子園よりいふやのあはれ他者不  
 解朝考館の序にも今再して再と記するは原土羽河  
 流の流はいつくかのあはれ平山と其あたるまわりそ中  
 にせりりいふや新編の序にも平山と其あはれ為章のといふれい

新のからいふこととていふは原山にありていふ人もあはれ  
 といふてまたつらふ感といふことたりそは或人の書と解  
 たりといふこととていふは新のいふことたりといふこと  
 りといふは才の人先いなりあはれは女乃とていふこととて中  
 宣耀殿といふり女帝の寵をうりて妹の思ふこととて推  
 中勅をうりていふが面貌といふこととていふこととていふ  
 事とていふて宣耀殿といふこととていふこととていふこと  
 といふこととていふは様衣より後に地をうりていふこととていふ  
 為章の流といふのわらうといふこととていふこととていふこと  
 といふこととていふこととていふこととていふこととていふこと

○たのあはれは中ふ女角といふれはあはれはあはれはあはれは  
 樂つていふこととていふこととていふこととていふこととていふこと























ふりつてしむるはれなきの多く敷し  
人市女と有りてありし  
たるがかりのけり  
付のうるともり

○信同は甲字と誤り 曹カフト  
以て梅ふれ記曲後と毎秋

甲者執曹鄭は設其大者奉其小者便也甲鐘也曹魏

琴也ともは甲曹の義別なり或人云は得甲曹

とありり程量なり是の甲曹の義の首なり

○血は信のりさりのきり信同のりさりと指しり

ふねさるの市ねが信書徒之以血中史のりさるふれ

るゆふふ又れ記檀弓海高の卑執教之妻法血三年

母の鄭は言法やや血出るも人のけりあり

にやうりの執弁れたる遠東家の信を

○特信款のきよと自負のりさる曲後とよ日

車上下廣款鄭は為若自新廣猶弘也

あはりりも有國御序を叙のりさる違他のりさる指揮

らわれぬさるけりさるけりさるけりさるけり

けり信款のりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

○せん今信款のりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり

りさるけりさるけりさるけりさるけり











四位二十回正五位十二回從五位八回女藏三分  
 之一職分田太政大臣四十回左大臣三十回大  
 納言二十回右大臣十回左大臣十回右大臣十回  
 志<sup>カハハ</sup>し兼官ありともりなきは他<sup>シマウエン</sup>に在官の官位は抱<sup>カハハ</sup>らば  
 代<sup>シ</sup>相傳し天唐の使<sup>シ</sup>りあり後藤氏の威權盛たりし時  
 國々にあまきおとせたりもんはわもたふとておの  
 今封建の世乃人小族より起るるうづはる

○昔人とい昔の世族も富々の世族に及びざるはるる  
 御ふ殿令諸佛寺の造立廣大なるものありはるる  
 昔よといその功人氏と強健の徳をぶかりて費用を  
 材木金銀乃其のすよよるゆゑもしられは佛を建  
 立れ功德と名はるにたふらるるも是れ佛の業

と永長律師の歌也し終りもんし

○又昔人神社小位階とまらるるといふもてつ  
 昔よとい昔の世族も富々の世族に及びざるはるる  
 と奉らるるし如き人の令のまれどしはるるも是れ  
 福前といつ必正一位と社ありり免許せらるるは  
 ○昔年より舊國南箱の徳は三百の家の昭々をまつけ  
 らんぞうしつめもつむもつらまらるるも是れはるる  
 久文と給やりのめせらるるはるるの久義洋をいふ  
 とつらるるもつめもつらまらるるも是れはるる  
 少つらるるもつめもつらまらるるも是れはるる  
 昔よとい昔の世族も富々の世族に及びざるはるる















Handwritten text in cursive style (sōsho), likely a preface or commentary, written vertically from right to left. The text is dense and fills most of the right page.

馬伴 資規 誌

享和元年辛酉春三月刊行

平安書肆

- 林 伊兵衛
- 木村吉右衛門
- 齋藤莊兵衛
- 鷓鴣惣四郎



